

3

数字から言葉へ

クリスチャン・C・パシオン

この文章を書いていると、学生時代に、ファシリテーターからペンと日記帳、それから答えなければならぬ質問のリストを渡されたときのことを思い出します。リフレクション・セッションと呼ばれもので、与えられた質問について深く考えなければなりません。しかしときに、思考は湿度の高さにやられてどこかに飛んでいき、ぼんやりと空間を見つめてしまいます。そしてしばらくすると我に返り、与えられたテーマについて自分の考えを述べることができるようになります。そうしたセッションの思い出が、食事やクラスメートとのおしゃべりだけではないことは、皆さんにもわかっていただけたと思います。自分自身の精神的、感情的な在り方とのつながりこそが最も重要なのです。自分の過去の行いや、自分を向上させ、より良い人間になる方法、至高の存在との関係、そしてもちろん理想の未来など、さまざまなことを熟考することができるのです。それはいわば啓発的な作業です。今回の執筆作業全体を通じてもそのように感じています。この12ヶ月を通してさまざまなことを振り返り、こうして文章を書いているあいだ、たとえば言えば、僕は極寒の海に飛び込み、別の姿になって天に昇ったような気分でした。僕はこのやり方がとても気に入っています。自分が書くべきだと思ったことは何でも書けるのだということを教えてくれたからです。

今回は、研究者としての僕のパーソナル・ヒストリーについてお話します。そのタイトルは「数字から言葉へ」がふさわしいでしょう。というのは、「パーセンテージ」「結論」「統計的に有意な差（計量分析がうまくいかなかった場合に経済学者が最も恐れる言葉）」という決まり文句を使わないで文章を書くのは初めてだからです。経済学者出身なので、仕事の大半は数値データの分析をすることです。この文章を書いていると学問的な仕事の忙しさから解放され、ほっと一息つくことができます。簡単に書けるわけではありませんが、充実しています。自分の人生やキャリアについて考える時間を多く持ったことで、自分自身をよりよく知ることができたと思っています。時間はかかりましたが、それはどのようなテーマに焦点を当てたらいいのか、本当にわからなかったからです。しかし、誰にでもあるように、絶え間なく降り続く激しい雨のように思いや考えが急に浮上

してくる瞬間が僕にもあったのです。では、しばらく数字のことは忘れて、ミンダナオの研究者としての歩みを語ってみます。

僕はずっと研究か開発の仕事をしたと思っていました。大学卒業後、JAIME (Joint Ateneo Institute for Mindanao Economics、ミンダナオ経済のためのアテネオ共同研究所) にリサーチアシスタントとして入りました。JAIMEはダバオ市にあるイエズス会の研究所で、ミンダナオの経済や環境に関する政策研究を行っています。代表はアテネオ・デ・マニラ大学経済学部名誉教授のヘルメリノ・"ボーイング"・バウティスタ博士です [ボーイングはニックネーム。フィリピンではニックネームをよく使う]。バウティスタ博士は、環境・資源管理問題や政策についての研究で著名な経済学者です。天然資源問題 (たとえば鉱業や地下水利用など) を研究するさまざまなアプローチを紹介していただき、僕もそうしたテーマに興味を持つようになりました。先生の知恵と謙虚さ、そして寛容さに、いつも感謝しています。オフィスでの最初の仕事は、データの棚卸しでした。ふたりのリサーチアシスタント (ケビン、カルロ) とともに、ミンダナオとダバオ市に関する多くの社会経済データを集め、この地域の基本的な状況を把握することに努めました。一つひとつの仕事をごこなすには、タイピングや数値計算のスキルもさることながら、まるで大学の代数の講義に挑むかのような忍耐力と臨機応変さを真剣に身につけなければならないことを実感しました。

公式統計により、ミンダナオには極めて貧しい州があることを知り、研究所での活動を通じて、貧困と所得格差という二つのテーマを探究したいと考えました。



ダバオ・オリエンタル州ルポンの水揚げセンターでの漁師たち。
新鮮な魚を箱に積み込むのに忙しい。

出典: Official FB page of LGU Lupon (2021年9月4日)

なぜなら、貧困は人間開発目標を達成する上で大きなボトルネックとなるからです。また、僕自身、貧困が日常生活の一部である地域で育ったので、この試みは非常に個人的なものだと考えています。僕たちの町の貧困がどのようなものかという、たとえば、朝昼晩と干物を食べている家族や、空腹のまま学校に行く子供たちがいます。5人の子供を抱え、季節ごとの漁業に頼ってかろうじて生活している夫婦もいます。この町では、ほとんどの人が漁業や農業以外の賃金労働に頼って生活しているため、栄養のある食べ物やきれいな水、きちんとした住居など、必要最低限の生活に足りるだけの収入を得られていません。僕自身もこの問題の犠牲者でした。両親は中等教育を受けていないため、安定した職業に就いておらず、屋根のある家に住むこともままならないような、下働きの仕事をしていました。貧困研究の道を進むことは、貧困とは何か、その原因は何かを知ることだけではなく、僕自身の経験を分かち合うことだと考えています。

ボーイング先生やワカ先生（東京大学からの客員研究員）がダバオ市にいるときは、いつも僕たち（JAIMEのリサーチアシスタント）に日本食レストラン「ラーメンニコ」でごちそうしてくれます。そこでは、おいしい「アポ山巻き」[アポ山とはダバオ市の南西にある火山。標高2,954メートルでフィリピンの最高峰]が食べられます。巻き寿司を山のように積み重ね、その上に日本のマヨネーズをかけたものです。味は絶品で、この店のベストセラーです。いろいろな日本食を楽しく食べながら、仕事の話をしたり、何でも話し合ったりします。草の根の研究をしようという話になり、貧困や環境マネジメントの研究にも興味がわいたような気がします。僕は、マクロ経済学や金融経済学といった経済学の主流となる研究領域から離れようと思っています。そこにはエレガントな経済・金融開発モデルはありますが、一方で、貧困、飢餓、失業、環境破壊などわれわれの社会が抱える多くの問題を解決できないもどかしさを感じるからです。こうした現実の問題を研究することは、人びとが実際に置かれている状況を明らかにするような社会統計を扱うことになり、よりインパクトを持つでしょう。

僕は、研究をするときは、人に寄り添い、人の思いを聞き、人の感情に触れたいと思っています。だからこそ、仕事において、言葉と数字を組み合わせたいのです。たとえば、数字は論理的に薔薇が薔薇であることを教えてくれ、語りや認識は、薔薇に多数の品種があることを示すことで、物語をより豊かにしてくれます。つまり、僕が言いたいのは、経済学は、わかりやすすぎることです。文章を書くとき、僕はあまり数字にとらわれたくありません。自分の研究に流動性を持たせたいのです。現地調査やインタビューが好きなのは、専門家や

一般の人から重要な情報を集め、自分の理論や結果を検証できるからです。社会学や人類学の研究における批判的なアプローチは、社会現象や環境問題を記述する上でも同様に価値があります。経済学者が質的研究者から学ぶのと同じように、後者もまた前者から学ぶべきでしょう。

研究者であることは、それなりの困難も伴います。その中には、教育や事務の負担が大きい、資金調達が難しい、多くの分野で専門家が不足している、といった数十年來の問題が含まれています。

これらは、国公立大学、私立大学を問わず、研究者や科学者が直面する共通の問題です。僕は、特にフィリピンの高等教育の不平等を強調したいと思います。博士号を持つ経済学者のうち、ミンダナオで教えることを選んだ人はほんの一握りです。フィリピン大学やアテネオ・デ・マニラ大学のような一流校の経済学者の数と比べてみてください。僕は、ここで自分自身の研究目標を達成するのは難しいと感じています。それは、僕が所属する大学やこの地域 [ミンダナオ] には、研究上の関心について指導を仰ぐことができる学者がほとんどいないからです。一般的に言えば、政府が国立大学や私立大学で働く研究者にインセンティブを（つまり、より多くの資金や補助金を）与えることができれば、フィリピンの研究開発が直面する状況は大いに改善するはずで

す。ミンダナオのさまざまな問題やあらゆるテーマを研究することは、過去を振り返り、それに対する自分の洞察を記し、来るべき状況について予測し、そしてそれに対して何ができるかを提案できるようになる、という一連のプロセスです。



交通の社会的側面に関する研究で
売店の経営者にインタビューする著者。

真理の探究者として、僕は将来、自分の仕事は何らかの形で、フィリピンにおける貧困、不平等、資源枯渇の現実にも光を当て、こうした問題に立ち向かうための政策の選択肢についての公論に影響を与えられるようになりたいです。僕が思い描いている将来は、フィリピンの研究者や科学者が、開発のパートナーとして潜在能力を十分に発揮するために、真に正当な価値と評価を与えられるというものです。さて最後に、人にはそれぞれのユートピアというものがあります。しかし、僕自身は、国家としての発展を妨げている問題を解決するためには、先見性だけでは不十分だと感じています。われわれに必要なのは、コミットメントです。僕は、研究者がミンダナオにおいてミンダナオのために働くことを約束する、豊かなミンダナオを見たいのです。

(訳：青山和佳)



ルボンの沿岸道路を自転車で走る子供たち。